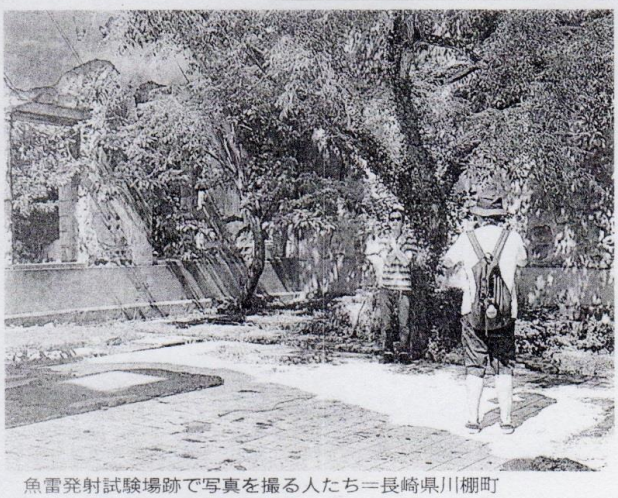
戦跡 インスタ映えで注目

悲惨な歴史知らず肝試しも

戦争の記憶を伝える場所で、これまでにない変化が起きている。戦争遺跡が心霊スポットや撮影ポイントとして、若い世代を引き寄せているのだ。敗戦から73年。戦後世代が8割を超えるなか、「消えゆく戦争」とどう向き合っていくのか。



魚雷発射試験場跡で写真を撮る人たち＝長崎県川棚町

記録と記憶

消された戦争 6

「異空間のオーラがハンパない」「廃虚美」――。ネット上の写真共有アプリ、インスタグラムで「魚雷発射試験場跡」を検索すると、廃虚の中で、モデルのようにして立つ若者たちの写真が数百件、次々と表示される。

長崎県川棚町に残る戦跡。太平洋戦争中、佐世保港から駆逐艦に積み込む魚雷の発射試験が行われていた。この場所が数年前から「インスタ映え」すると話題を呼んでいる。人気にあやかろうと町の「地域おこし協力隊」は昨夏、ゲームやアニメのキャラクターの衣装を着て撮影をするコスプレイベントを開いた。

企画した協力隊の飯田千織さん(28)は3年前に初めて試験場跡を訪れ、「建物が朽ちるほど長い間、平和が続いてきたんだ」と感じた。ここなら、町おこしにも、平和を考えることにもつなげられると考えた。

募集チラシでは、戦争について一切触れなかった。イベントでは「戦時中は人を殺す武器を作っていた」と説明したが、飯田さんはこう考える。「最低限の概要を知ることは大切。でも『平和は大切』と気づくために、深く歴史を知っているかはそれほど重要とは思えない」

跡地でキャンプ

「この場所が、あの悲惨な戦争の手助けをしていた。それを知らずに今を生きることは、本当に幸せなんでしょうか」。京都府舞鶴市の小坂光孝さん(88)は、バーベキューを楽しむ家族連れを横目につぶやいた。目の前に広がるキャンプ場は、旧海軍の火薬工場の敷地。近くには朽ちた建物も残るが、その歴史を説明する案内板などはない。

「神風が吹いて、日本が必ず勝つ」。14歳で工場に動員された小坂さんは、そう信じて疑わなかった。人間魚雷「回天」の火薬を詰める作業に没頭した。回天で亡くなった戦没者は145人。平均年齢は21・1歳だった。

草木が生い茂る工場跡を再訪し、高校生たちと出くわしたことがある。「こんな所で何を」。そう聞くと「肝試し」と返ってきた。言葉を失った。あれから約10年。市の中心部には跡地をモデルにした子ども向けのホラーハウスができた。

かつて学徒動員で働いた第三海軍火薬廠(しょう)の跡地(左奥)でたたずむ小坂光孝さん＝京都府舞鶴市

ガマに忍び込み

「(歴史は)知らなかった」「肝試しだった」。戦跡を荒らした少年たちがそう語った事件から、まもなく1年になる。

沖縄県読谷村で昨年9月、大戦末期の沖縄戦で住民83人が「集団自決」に追い込まれた洞窟「チビチリガマ」に当時16～19歳の少年4人が忍び込んだ。動画を撮り、千羽鶴を引きちぎり、遺品のつぼを割った。

平和ガイドとして幾度となくガマを訪れてきた沖縄国際大非常勤講師の伊佐真一朗さん(33)は、心霊スポットと言われているのは知っていた。それでも、ショックだった。

小さいころから周囲の大人に、ガマや平和祈念資料館に連れて行かれた。懐中電灯で照らしても奥が見えない暗闇や、戦時中の水が入ったままという水筒の存在が胸に残った。父や母や、子を亡くした人たちにとってかけがえのない場所――。歴史を少しずつ学び、そうした感覚は自然と身についた。

いずれ戦争体験者はいなくなる。だから、ガイドでは「想像力」を強調する。

ガマが「暗くて怖い」と感じる人には、「戦争中は『ここにいれば安心』と逃げ込んだ場所。今とは違う価値観があると想像して」といった具合に。ただ、あの少年たちがなぜ一線を越えてしまったのか、今もわからない。

＝終わり

(山本知佳、国吉美香)